

# 「和尚塚」 ～和尚の名前は～

宇都宮伝統文化連絡協議会顧問 柏村 祐司

宇都宮市立戸祭小学校の西にある幹線道路を「和尚塚通り」という。近くに「和尚塚」と呼ばれる塚があることからその呼び名がついた。昭和二十五（一九五〇）年には和尚塚町と町名にもなったが、昭和四十（一九六五）年住居表示に関する法律の制定により和尚塚町の名は廃止になった。

和尚塚は、戸祭二丁目地内、本門佛立宗遠歎寺の東隣にある。かつては直径約二〇メートル、高さ約二メートルの円墳状をしていたものと思われる。一時、遠歎寺の境内地となっていたが現在は、市の所有地となっている。

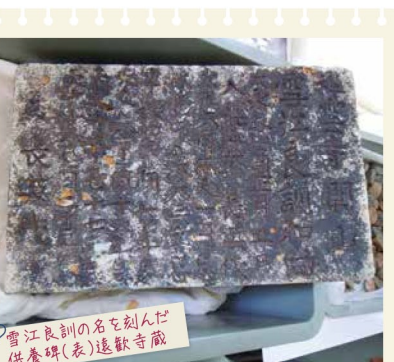
和尚塚の名は、すでに江戸時代には知られ、明和八（七七）年に書かれた『宇都宮故実抄』に「和尚塚は高定の墓なり」と記されている。この和尚塚の実態が明らかになったのは、昭和八年、遠歎寺が納骨堂を建設するために塚の一部を掘った際に供養碑等が掘り出されたことによ

る。この出来事は下野新聞でも取材され昭和八年八月六日の新聞紙上に「掘り出した和尚塚の碑石と奇しき因縁物語」と題し写真入りで大きく掲載された。記事の内容を要約すると、元地主の小林氏によれば、昔から有名な和尚の墓だろうといわれている。明治初年頃は馬場町の小倉屋で所有しており、当主は何かあるだろうと塚を掘ったが何も出ないばかりか本人も間もなく亡くなった。小林氏の父が買い取ったが不幸が続いたので手放した。その後、黒磯の富豪人見千秋が近くに築十四師団ができ利用価値が高くなると付近の畑と共に購入、さらに大田原の細小路由吉の手に渡ったがいずれも不幸が続いた。大正十年に本門法華宗佛立協会宇都宮親会場の手に渡り、毎月四回ずつ供養するようになると何事も起こらなくなった。やがて信徒も二百名に達したので本堂ならびに納骨堂を建設することになり、塚の一部を掘つ

たところ供養碑と多数の経石が出てきたということである。

供養碑は凝灰岩製で縦約三〇センチ、横四〇センチ、厚さ約六センチのもので、両面に文字が刻まれている。碑文によると祥雲寺開山雪江良訓和尚は大永五（一五二五）年に亡くなったが、享保九（一七二四）年に三百年忌の供養を行った際に碑を作ったことが分かる。和尚塚は『宇都宮故実抄』にある高定ではなく、その名の通り雪江良訓という和尚の墓であったということが判明したのである。

ところで祥雲寺とは八幡山の西麓にある曹洞宗戸祭山祥雲寺のことである。寺の言い伝えによると開基は戸祭備中守高定であり、開山は雪江良訓和尚である。この雪江良訓和尚は曹洞宗の高僧伝に行歴が載るほどの高德の僧であったという。そんな高僧であったからであろう。亡くなった後に祥雲寺から約二キロメートル先の所に丁重に葬られたのである。



雪江良訓の名を刻んだ  
供養碑(表)遠歎寺蔵



現在の和尚塚

和尚塚がある地域には、他にもいくつかの塚があったという。和尚塚は一番大きな塚であるところから將軍塚とも呼ばれ、他の小さな塚は、来塚と呼ばれた。和尚塚が築かれた当時、その地域は、台地の上に平地林が広がる所であった。戸祭の町からすると、世間から隔絶された霊地とされたものと思われる。だからこそ雪江良訓和尚を葬るに相応しい極楽浄土の地とされたのであろう。